

# 会 報

サンケイ国際書会  
Sankei International SHO Association

昭和59年／1984年  
12月15日(土)  
第1号

## クリーンな姿勢で前進を!!

サンケイ国際書会会長 北川 貞二郎

「サンケイ国際書会」は、正しい書会の存在を願われる皆様の、サンケイ国際書展に対する熱意と絶大なご協力が結集し、その推進力として新たに発足いたしました。

サンケイ展は今春、第1回展を旗揚げしたばかり、いわば一人歩きを始めたばかりの若さあふれる展覧会です。それだけに既存の大型展と違って、ユニークでクリーンなものでなければなりません。

既存の大型書展はややもするとボスの作家の縦割り金権支配による審査結果例などが多い、ということを耳にします。若いサンケイ国際書展はこのようなボス的作家の存在を排除し、審査も公正に行わなければ、新たに旗揚げした意味がありません。

その点、サンケイの旗のもとにご参集下さった書作家各位は、そ

の意を十分理解されたうえで、熱意と多大なご協力を寄せられ、1回展を成功に導いて下さいました。特に審査をご担当下さった先生方が、クリーンでさわやかな審査結果を示されたおかげで、「サンケイ展公正なり」の評価が高まりましたことは、主催者として深く感謝し敬意を表する次第です。

それぞれご社中を抱えられている以上、私情を交じえず責務を理想的に遂行することは至難の業かも知れません。しかし、とかく若い芽は批判的となり、うかうかすると摘みとられてしまいます。

全会員が1回展で示された熱意と、クリーンでさわやかな姿勢を保って下さるなら、国際的視野に立った新人の登竜門としての価値も倍加し、日本一はおろか、世界一の書展に成長していくことは間

違いないと確信いたします。

サンケイ新聞社は「サンケイ国際書会」の経済力を一日も早く確固たるものとし、基盤のしっかりした法人組織に育てあげたいと考えております。そのためにもサンケイ国際書展をより理想的に、よ

り大きく前進させていかなければなりません。

会員の皆様のより一層のご理解ご協力をお願い申し上げます。

(サンケイ新聞社専務取締役事業局長、サンケイスポーツ新聞社社長)

## サンケイ国際書展に寄せて 在日韓国大使館公使 姜 範錫

「書は人を表わす」といいます。これを、くにとくにとのかかわり合いでいえば、「書は国を表わす」といえます。

お互いに、相手の国柄を理解することは、国際親善の深化につながります。と、想いを致しながら、第二回サンケイ国際書展の開催をこころからおよこび致します。

書は、もともと東洋三国のお家芸なのでしょうが、当今は世界各国の方々の関心を集めつつあるようです。書道なり書芸の“道”と“芸”は普遍的なのでしょう。それ故に、書の国際展も成り立ち、また将来の発展を期約することができるのでありましょう。

書の国際展は、私の聞き及ぶ限り日本国内でも二、三はあるようです。それぞれの国際書展の“個性”が競い合ってはじめて書を通じての国際交流の調和は活き活きと保たれるものと信じます。“サンケイ的、あまりにサンケイ的”な国際書展へのご発展を強く期待致します。それが、第十回、第百回のサンケイ国際書展へとつながっていくよすがと信じるからであります。

## サンケイ国際書会の発足に想う

サンケイ国際書会常任理事 十鳥 霊石

本年4月「第1回サンケイ国際書展」を開催して新しい分野を開拓したサンケイ新聞社は、第2回公募展を来春4月12日から16日まで、会場を東京・池袋のサンシャイン・ワールド・インポートマーケットに移して開催することになったことは、既に御承知のとおりであります。

これを運営するための母体となる「サンケイ国際書会」の設立について、第1回展終了後から関係者がその準備を進めておりましたが、去る9月28日東京会館において設立総会を開き、200名にあまる関係者出席のもとに提出議案を慎重審議し、会則ならびに役員等の人事を別掲のとおり決定して発足しました。

サンケイ国際書会は、次のとおり設立の目的を明確にしております。すなわち

- (1)書芸術の国際交流による世界各国との友好親善を深める。
- (2)国際間相互の技術、創作活動のいっそうの向上発展をはか

る。  
 となっていますが、組織的には、運営面をサンケイ新聞社側が担当し、審査面を作家側が担当することになっております。

どのような組織においてもこれを運用するのは人であり、どんなに立派な組織がつけられても、適材適所に人を得なければ、その成果は決してあがるものではありません。

私たちが苗木をわが家の庭に植える場合にも、大きく伸びる木とか、あまり伸びないが美しい花を咲かせる木とか、それぞれその木の特徴や成長の過程などを考え、周りの植木とのバランスなども考慮したうえで、植える場所をきめますが、植えた当座は決してじっくりするものではありません。それが2年たち、3年を経過するうちに周りの植木ともすっかりなじんで、あたかも一幅の絵のように調和して見えてくるではありませんか。こうした状況を眺めるとき、時の流れというものに偉大な力を

痛感せずにはいられません。

サンケイ国際書会も発足にあたってベストと考えられる人的な配置を行ったでありましょうが、あたかも庭の植えこみをしたときのように、今直ちにすべてがしっくり調和するという訳にはいかないでしょう。

役員を委嘱されたわれわれは自己の職責を自覚し、最善を尽くして、サンケイ国際書会の実績をかめるために努力をしますが、時

の経過という大自然の偉大な力のなかで、おのずから淘汰されるものもあるでありましょうし、われわれの努力と相まって充実したすばらしいものにならなければならないと、覚悟を新たにしております。

役員ならびに会員各位の自覚を軸として、新生サンケイ国際書会の発展に向けて、みなさんと力をあわせ、大きく大きく育てあげようではありませんか。

## サンケイ国際書展に夢を託して

サンケイ国際書会常任理事 山田 松鶴

この度、サンケイ国際書会の設立と共に愈々書道界へ新風を吹き込むこととなりましたことは誠におめでたいことと存じます。

総合書道会が多々ある中に今サンケイ国際書会が参入する意途は何処にあるのでしょうか。まさか既成団体の後塵を甘んじて受ける積りは更々無いことは勿論と存じます。

その点に視点を当ててみますと、サンケイが目途するその一つは、書芸術を通じて国際友好を果たすという命題を背負って立ったこと

であり、又その一つはサンケイ傘下の書作家群が今迄に類をみないクリーンな書道展を築いていくという大眼目にあると思われれます。

国際的な問題は、国情の違いはあるしするので種々の困難も予想されますが、それを克服して既にその端緒を得て、その発展を予測できる段階にあると言えます。

一方クリーンな展覧会、つまり汚れのない清潔な展覧会の実現ということは行うに難しいのが現書壇であるだけに、サンケイがその使命感に燃えて敢然と取り組んでい

こうとする姿には大きな魅力があると言わなければなりません。菱山専務理事さんがよく「いいものはいいんだという展覧会をサンケイはもちたい」と言われます。私もその言葉に共感して参加し、クリーンを標榜しております。

現在の書道界では、ともすると一人の審査員というトップがあって、その傘下という縦の系列の中で、トップの書流を表現することによってその組織を誇示するというような傾向があるのではないかと考えますが、サンケイの場合はどの流派をも問わず、偏することなく佳い作品を冷静に見究める眼識と、躊躇なくそれをとり上げる度量とをもった審査陣が要求され結果として公平な、クリーンな審査が展開することが、願望されていると思います。

従って一党一派に固執する旧態の人には理解の出来ない厳さがあ

り、具眼と度量の人であればよしとして、敢えてボスの存在を不要とする処にサンケイの真意が読みとれるような気がします。

又これを製作者の側からみれば、人それぞれに学書の過程に差違があり、一概に申せませんが、究極的には師匠の字を単に鵜呑みにするといった拘束性から脱脚して、本当の自分の仕事を表現するという本質的な立場とする製作が望まれるということだと思います。

今全国には膨大な書道人口があります。そしてその中には、現在の組織の中ではと諦めて雌伏しておられる方も多々あるわけです。

卓近な例で申し訳ありませんが、そおいう方々の出て来た頭を叩いて引込めさせるもぐら叩きではなく、出て来た頭を掘りおこして共通の土俵の上で評価するという大きな仕事もあるのでしょう。

結論を急がれる方々からは、こ

れは単なる理想論で実現性は乏しい位に言われるかも知れません。又サンケイ展を早飲み込みして塾展の延長位に軽く解釈する向きもあるかと思えます。

仮すに時を以てすと申しますが、

## 明日の書に向かって

サンケイ国際書会常任理事 小川瓦木

いうまでもなく書は長い伝統を持ち、東洋独自の芸術として展開してきた。書壇はいま乱戦乱立、“天気晴朗なれど波高し”といったぐあいであるが、その盛況は目をみはるものがある。折も折、かねて構想を抱いていたサンケイ丸が期待をになって進水した。書壇の浄化、書の追求、新人の育成、国際交流等々積荷は満載である。何れの一つをとってみても書壇にとっても、書人にとっても重要なことがらである。

サンケイの仕事は既成のルールに乗っての仕事ではないだけに1、2年の生みの苦労があることも覚悟しなくてはなりません。

(第2回サンケイ国際書展伝統書審査主任)

では我々作家にとっては何をどうしたらよいか。先づ第一に自からの書に対する姿勢を正すことから始めなければならないと思う。“書とは何か”という命題に取組み真剣に立向う姿があろう。しょせん書は人間性の象徴ということにつきるのだから、自分自身がふらふらではどうにもならない、更には書のとらえ方、考え方を確立することだ、信念のないところから書は生れない、いたずらに技巧を弄するだけではだめである。書

御表装一般  
展覧会用貸額・屏風

## 佐久間太熙堂

〒111 東京都台東区寿1-18-10

☎03(844)1353 振替東京2-3080

掛物・額装・屏風

## 湯山春峰堂

東京都港区芝1-12-9

☎03(451)6002・6003

は伝統芸術であるが、伝統を尊ぶことと伝統を超えて創造することは矛盾するものではない。

今日、書は芸術としてライトを浴びている。その最大の理由として用美の世界から視覚芸術の領域まで脱出したからである。今我々は書の歴史の大きな転機の真っただ中にいるのである。自己の立っている位置をはっきりと認識しなければならぬ。“昨日までそうであったから今日もそうする”ということではなく、今日の創造を明日に向けなければいけない。

余談になるが、先日ニューヨークの美術史家ミルドレッド女史の来訪をうけた時、“今ニューヨークで日本の伝統書の展示会をしているが、たいくつで見ることができない。我々は文学は読めないから見ることができない”と感想をもらったが、これこそ視覚芸術として失格したら世界の仲

間入りは出来ないということの証言である。サンケイ丸乗組員としてはこの自覚がなければ国際交流の場には臨めない。次に本会の看板は何といってもクリーンでガラス張りの審査である、公募展がだめになるのは審査が濁ってくるからだ。山田松鶴氏のいうように“よいものはよい”で一貫することである。新人だろうと、アマチュアであろうとそんなことは関係ない、作品本位で行くことである。芸の世界に年功序列はない、師匠が落ちて弟子が入ることなどは珍しくない、小錦のように強ければよいのだ、“よいものはよい”で行く土俵だから努力次第で誰でも栄冠はつかめるのである。第1回展でもそういう例は沢山あった。新人の登竜を期待したい、それが本展を更に活性化し発展させる原動力となる。第2回展は新しい審査の陣容も充実し整った、1回の

失敗で失望する様では本物にはなれない、新人は勿論の事、2回3回と挑戦してこそ始めて入選、入

賞の味わいが出てくるものである。言葉をかえれば挑戦そのものが即書の研究なのである。

## 8年間 懐に暖めたサンケイ展

サンケイ国際書会専務理事 菱山 甫

「既存の大書展は汚れ切っている。サンケイさん、理想的な公募展を開催してくれませんか…。私はサンケイさんに全てを賭けているんです。いつでも駆けつけて精いっぱい働きますよ…。」8年前、私が編集局から事業局に異動して、書展の後援事業担当に首を突っ込み始めたころ、瑞雲書道会の前理事長であった故・豊道夏海氏はよく語りかけてくれた。

当時、瑞雲書展はサンケイ新聞社と共催名義で開催されていたため瑞雲書道会の幹部の方々が私に「サンケイ公募書展」開催を要求する声は高かった。中でも一番、熱意をこめて私の重い腰をあげさせようと激励して下さったのが川上清亭、鉄晶両氏だった。

＝書展開催への決意＝

日展をはじめ既存の大型書展の運営にあきたらず、サンケイ展にユニークさを求める声が高い以上、

私自身の力で“理想的な書展”開催を実現しなければならない…と気負った決意をしたのは8年前のことだった。

だが、当時の私は書壇の内情に疎く、新聞社の事業形態そのものが単なる新聞のイメージアップのための社会奉仕の消費経済から脱却し、自立経営型の稼働部門へと移行する転換期。しかもオイルショック余波による不況の真っ只中だった。

出足をくじくように「読売書展が採算点に達する出品点数をかき集めることができず、担当者は苦闘している。潰れるのは時間の問題」という情報が入った。

「うかつに手を出してヤケドをしてはならない」…。人脈づくりこそ前進への手がかりと、以後、可能な限りの各社中展の後援を通じ、あらゆる書壇への接近を私なりに試みたつもりである。

書画表装・展覧会用貸額貸屏風

清 蘭 堂

本 社 上田市材木町1-2-28 ☎ 0268 (22) 2471 (代)  
東京店 東京都台東区東上野6-3-5 ☎ 03 (844) 8595



故・豊道夏海氏の他界。後継幹部との意思の疎通がはかれなかったことによる瑞雲書道会との絶縁。事業局の指向がニューメディアに大きく向けられ、書道部門が社内的に軽視されてきた…など、書展開催に関するマイナス要因がふくらみ、私の仕事内容も手取り早く小まめに稼げる他分野に追われ、サンケイ書展開催プランはサンケイならではのユニークさも、大義名分も見出せないまま懐ろに暖めていたずらに歳月を費した。

＝実現に向かって始動＝

昨年6月、国井誠海氏（サンケイ国際書会常任理事）の知己を得た。サンケイ展に最も熱意と協力を寄せてくれた友人、K氏の紹介によるものだった。サンケイから大柴英雄君（サンケイ国際書会事務局長）が同席した。いま振り返ってみると、これが1回展開催の礎石となった“四者会談”だった。

国井氏は大作家である。正直いって私は「尊大ぶったタイプの気障なじい様に相違あるまい」と予想していた。意に反して父親のような暖か味を初対面から感じさせる温厚篤実な紳士。それでいて青年のような仕事に対する情熱を言

葉の端々に鋭く感じさせる。

私は“心から尊敬に価する大先輩”と惚れ込んだ。しかもサンケイ展開催に意欲的情熱を傾注して下さる。「強い味方を得た」…。たちまち趣旨や大まかなプランができ上がった。激しい雨音を聞きながら阿佐ヶ谷の小さなスナックのカウンター奥にある四畳半での貴重な一夜だった。

とはいえ具体的な作業展開は大幅に遅延した。折悪しく私自身がフジサンケイグループが昨春秋、原宿の国立競技場一帯で初開催した「国際スポーツフェア」実行事務局のスタッフとしてフジテレビ内の事務局に出向勤務。これと並行して担当していたのが同年10月に池袋のサンシャイン美術館で開催した「中華民国書法展」。どちらもサンケイは主催者である。担当としては少しも手を抜くことは許されない。この前後の約5ヵ月間、平均睡眠時間は1日3時間程度という激務だった。この合間を縫っての1回展役員構成、諸準備の進行は大難産だったが国井、友人K両氏の親身も及ばぬ理解と協力の賜物もあって、今年1月中旬にはどうやら骨格を組み立てる

ことができた。いい忘れてがそれまでに1人娘の結婚式（昨年11月）もあり、1月の天皇展（於三越）の開催スタッフの一員として一部職務も負わされた。（この寸暇をやりくりしてお酒も飲むし、カラオケもこなす）われながらタフだったねえ、と感心している。

＝大成功の感激＝

1回展は準備委員会一審査打ち合わせ会一公募開始一締切一鑑別一審査会一飾り付け、撤去が四回に及ぶ四期変則開催一と、ただ無我夢中のうちにあわたたく過ぎ去っていった。

結果は大成功だった。私の当初の予想の出品目標2千点を5百点も上回る成績を取めたため、初回から採算がとれ、若干、黒字を出すことができた。

1回展の開催主旨、サンケイ展の存在価値を正しく認識して下さった出品者全員の協力の結実にはかならない。この収穫は大きい。①社内に於ける書道界に対する認識が高まったこと②先行大書展のようにボスの大作家の縦割り仕切りに依存せずに明朗な書展が開催できたこと③在野の書作家の真の力量、存在感を認識させ得る場が

できたこと一等々、枚挙に尽きないが、自画自賛になり過ぎてはいけないのでこの程度に留め置く。

蛇足ながら1回展の成功を私の功績と認めてくれた社は、モナリザ展開催らしいのヒットとして私に「事業局長賞」を贈り、表彰してくれた。私は現役の記者時代、3度、特種を書き、3回、編集局長賞を受賞したが、事業局長賞は10余年ぶりの珍事。「苦勞とまではいかないが、努力しただけのことはあった」と、過去の受賞に数倍する喜びを感じた。

職場の大柴、新井保昭両君を中心に陰になり日向になり私をバックアップしてくれた仲間の方も大きかったのに、私1人がハイライトを浴びていい気になってはいけな。とりあえず、大柴、新井両君とともにうな重の昼食(上)を食し合って祝い合った。

＝思いがけない友情の輪＝

晴天のへきれきだったのはこの受賞を知って1回展審査会員、無鑑査作家有志の方々が開いて下さった私の受賞を祝う会。社員以外の方々こんな晴れがましい場を設けて下さるのは前代未聞、ともにご招待された北川局長も大柴君

もその盛大なことにびっくり仰天。私としては新聞記者時代から苦勞のかけっ放しだった家内に出席してもらい、喜びを分かち合いたかったが、あいにく病床にあってそれが果たせず、娘夫婦と妹に家族として出席してもらった。サンケイの旗のもとに集い合った書作家各位の熱い友情と仲間意識に対し、家族ぐるみで感謝したかったからだが、席上、感激に胸が詰まってお礼のご挨拶も十分、意を尽くすことができ得なかったことを恥じ入るとともにお詫び申し上げる次第です。

なお席上、1回展審査員各位から贈られた記念品は私が手に入れたくて仕方がなかったスクーター（ホンダフラッシュ・50cc）で、私のレジャーの唯一の友として失われつつある青春のたぎりを喚起させ、皆様の熱い友情を常に想い出す役目を果たしてくれている。

北川局長に同様、贈られた記念品代は、局長がどうしても受けとることはできない。国井先生にお返ししてくれ…といわれ、私が一時、預かったが「サンケイ国際書会」の基金とするのが至当という意見が寄せられ、書会の口座を開

く基金として処置させていただいたことをご報告する次第。

私情を交じえ、1回展開催までの大まかな経過を書きつづったが「サンケイ国際書展」は巷間の一部に伝えられるように、毎日展、読売展の争点のスキ間を意識的に狙って、火事場泥棒のように切り込みをかけたものではなく、私が長年、暖めていた企画を、たまたまようやく実現の段階になって、降って湧いた両展の争点に遭遇したことを、会員諸兄に十二分に認識して戴きたかったことによる。

＝高き理想を求め前進を＝

ともあれ、いかに滑り出しが好調であっても、現状に甘んじることとは敗退を意味する。常により以上、高き理想を求めて前進しなければ真の勝利は得られまい。

私は2回展は1回展に倍増する質と量を満たさなければ失敗と考えている。何故ならば1回展の8倍の収容力を有する会場を、1回展の6倍の会場費、施設費を投入して押さえてしまったからだ。

役員、会員諸兄の一丸となった結束と奮起、1回展に倍するご努力ご協力を切にお願い申し上げます次第。

## サンケイ新聞社東京本社後援の書展

〔昭和59年〕

◇第11回現代和洋書道展 1月5日—9日、上野の森美術館（代表、岩沢蕙堂理事長）

◇第7回研墨選抜展 1月10日—15日、ギャラリー・ロイヤルサロンギンザ（代表、島村谿堂主幹）

◇天真書道会第18回展 1月12日—18日、東京都美術館（代表、小笠原撰耀理事長）

◇第25回新興書道展 1月20日—26日、東京都美術館（代表、木村東道）

◇第24回金蘭書道展 2月2日—9日、東京都美術館（代表、平山観月会長）

◇書道一元会公募展 2月3日—9日、東京都美術館（代表、金沢春邨理事長）

◇墨林ミニ選抜展 2月14日—19日、銀座ゆふき屋画廊（代表、遠藤乾鳳会長）

◇第18回誠墨会書展 3月29日—4月3日、朝日生命ギャラリー（代表、国井誠海会長）

◇第5回研友社書展 4月7日—13日、上野の森美術館（代表、田中鳳柳会長）

◇第1回サンケイ国際書展 4月13日—5月1日（4期かけ替え）期日生命ギャラリー（主催、サンケイ新聞社）

◇第7回高友社書展 5月8日—12日、上野の森美術館（代表、落野酔涯）

◇学生墨林綜合書展 5月19日—20日、都立産業貿易センター（代表、遠藤乾鳳会長）

◇第12回臨泉会書道展 5月19日—24日、上野の森美術館（代表、佐々木泰南会長）

◇第6回研墨書道展 7月13日—15日、豊島区民センター（代表、島村谿堂主幹）

◇小川瓦木作品展 6月26日—7月28日、パロセロナ市パロセロナ銀行展覧会ホール

◇墨林綜合書展 7月31日—8月5日、東京都美術館（代表、遠藤乾鳳会長）

◇第18回書道芸術協会公募展 8月15日—8月22日、東京都美術館（代表、高橋祥雲会長）

◇一煌会第17回展 5月1日—4日、洋協アートホール（代表、小川瓦木会長）

◇東洋書芸院第9回公募展 8月17日—22日, 東京都美術館(代表, 小川瓦木会長)

◇第19回書作家展 8月14日—19日, 上野の森美術館(代表, 木村東道会長)

◇第24回紫雲書道展 8月16日—19日, 朝日生命ギャラリー(代表, 布施鷹峯会長)

◇第5回鶴心書道会展 8月16日—22日, 東京都美術館(代表, 山田松鶴会長)

◇第12回誠墨会同人書展 8月30日—9月4日, 新宿伊勢丹新館8階, 伊勢丹美術館(代表, 国井誠海会長)

◇書道一元会展 9月13日—18日, 朝日生命ギャラリー(代表, 金沢春邨理事長)

◇第3回象形文字書展 9月13日—18日, 東武百貨店9階特設会場(代表, 北島瑞峰会長)

◇第9回鶴心同人書展 9月20日—25日, 日産アートサロン(代表, 山田松鶴会長)

◇第7回国際書道公募展 10月6日—8日, 千葉県浦安市文化会館(代表, 上野竹舟会長)

◇東洋書人連合・日本現代書ブ  
ラッセル展 10月9日—11月20日

(小川瓦木, 国井誠海, 佐野丹丘  
ほか168人の出品)

◇同巧選抜書展 12月6日—11日, 日産アートサロン(代表, 十鳥靈石会長)

◇第4回日韓書道交流展 12月12日—15日, 浦和市埼玉会館(代表, 十鳥靈石実行委員長)

[昭和60年]

◇第12回現代和様書道展 1月5日—10日, 上野の森美術館(代表, 岩沢蕙堂理事長)

◇第8回研墨選抜展 1月8日—13日, ギャラリー・ロイヤルサロンギンザ(代表, 島村谿堂主幹)

◇天真書道会第19回展 1月12日—18日, 東京都美術館(代表, 小笠原摂輝理事長)

◇第26回新興書道展 1月20日—26日, 東京都美術館(代表, 木村東道会長)

◇第1回書人クラブ展 1月26日—27日, サンシャイン美術館(代表, 北島瑞峰会長)

◇秋元梢風新作書展 2月19日—25日, 銀座・鳩居堂画廊(個展)

◇第25回同巧会書展 3月7日—12日, 銀座・松坂屋カトレアサロン(代表, 十鳥靈石会長)

◇第2回サンケイ国際書展 4

月12日—16日, サンシャイン  
ワールド・インポートマート(主催  
サンケイ新聞社, サンケイ国際書  
会)

◇梢門書道展 5月6日—12日,  
銀座アートサロン(代表, 秋元梢  
風会長)

◇十鳥靈石書作展 5月24日—  
29日, 銀座・松屋美術画廊(個展)

サンケイ新聞大阪本社並びに地  
区会社が主催する書展

[昭和59年]

◇関西の書家100人展 1月3  
日—16日, 大丸ミュージアム(サ  
ンケイ新聞大阪本社主催)

◇第1回サンケイ神奈川100選  
展 9月12日—16日, 横浜市民ギ  
ャラリー(神奈川サンケイ新聞社

## サンケイ国際書会

### 「第1回研修会」開催!!

サンケイ国際書会では、本年  
9月、国際書会の設立を契機に、  
本会会員の書道の向上をはかる  
ことを目的に「第1回研修会」  
を次の通り開催します。ふるっ  
てご参加ください。

[日時] 昭和60年1月20日  
(日) 午前9時30分～午後5時  
[会場] 文化女子大学附属杉  
並高等学校講堂(中央線・阿佐  
ヶ谷駅南口下車7分, ☎03—  
392—6636)

[研修会概要] ▼参加資格は  
書会の理事, 評議員, 会員の全  
員▼参加者各自が持参する作品  
に対して合評, 講評をおこない

ます▼各自の実習(用具持参)  
☆会費=4000円(昼食代含む)  
[講師] 小川瓦木氏, 国井誠  
海氏, 十鳥靈石氏, 山田松鶴氏  
(本会常任理事)

[参加申し込み・問い合わせ  
先] 昭和60年1月10日(必着)  
までに往復ハガキに住所, 氏名,  
所属団体名を明記して, ☎100  
東京都千代田区大手町1ノ7ノ  
2, サンケイ新聞社事業局内  
「サンケイ国際書会」事務局研  
修会係。☎03(231)7111, 内  
線3014, 3015

主催 サンケイ国際書会

主催)

〔昭和60年〕

◇関西の書家 100 人展 1月3日—13日, 大丸ミュージアム(大阪本社主催)

◇第1回さいたま閨秀 100 選展

## 第一回展を振り返って

受賞のよろこび

多田 游 硯

この度第1回サンケイ国際展に、思いもかけずサンケイリビング賞というご褒美をいただきましたことは、身にあまる光栄と誠にうれしく思っております。

小さい時からお習字のおけいこはいたしておりましたが、戦中戦後は一時中断しまして、その後東京に参りましたらすぐ近所に、書道史にその名も高い小野鷲堂先生のご子息小野成鷲先生のお住いがあったことから入門させていただきました。又お稽古を始めた訳です。もう20数年も前のことになります。子育てをしながらの手習いでしたから仲々思う様には進まなかったと思います。もうやめ度いと思ったことも何度かありまし

1月22日—27日, 埼玉県立近代美術館(埼玉サンケイ新聞社主催)

◇第2回サンケイ神奈川 100 選展 9月12日—16日, 横浜市民ギャラリー(神奈川サンケイ新聞社主催)

た。

先生亡き後はもっぱら古典の臨書をいたしました。始めは高野切という言葉さえ知らなかった私でしたが段々と古典の魅力に引き込まれ、和漢朗詠、元永本など習いました。特に元永本は太細の変化、シャープな細い線質などが好きで、この度の第1回サンケイ国際書展に出品するという事になった時、徒然草を元永風に書いてみようと思決めました。徒然草は第百三十九段を選び、紙は五色の扇面紙をみつめて挑戦してみました。自分としては割に楽しく気持ちよく思いのままに書けた様な気がしました。

受賞のしらせをきいた時はまだ信じられぬ思いでしたが、厳粛なる受賞式に参列いたしまして、これからの大変、もっとお勉強しなければと身の引きしまる思いがいたしました。

これからも奥の奥あるこの道を私なりに一生懸命はげんで行き、老後の楽しみになればいいな、と思っております。

座右の銘「道一筋」で……

米 国 生 田 博 子

約20年前、書の土壌の皆無であった米国でささやかに始めた習字教室が現在全米に亘って現代書の米国書道研究会として発展し、すでに興味本位のみでなく真に東洋文化としての書芸術の理解普及に活躍する人材の養成に着手しています。国井誠海先生の御指導も受けつつ日系二世、三世、白系の人々がサンケイ国際書展に挑戦する

## 「未完な荒削り」の書に努力を期待

第1回サンケイ国際書展  
伝統書部門審査主任 林 錦 洞

書壇の注目を浴びてサンケイ国際書展がスタートした。時を同じくして読売、毎日も新たな幕開けをする。三社それぞれの独自なカラーを打ち出して多彩な書展ブームをもたらそうとしている。

こうした中で、サンケイ展はなんらの制約、拘束もなく、それぞれの制作活動を尊重するというユ

段階にまでなりました。私は今年も第1回展出品作錬成のため訪日、直接国井先生のご指導を頂き連日の積雪の中を懸命に充実した日程を無事終えて出品し、書壇の動向や書友との意見交換に強い刺激を受けて帰米、はからずも外国人として特選受賞の朗報に接しての成果を将来の米国の書活動と発展の上から在米の人々と共に喜び合いました。文化的歴史の浅い米国で根を下し始めた書が至難な技術面の向上をも含め今後如何に持続的発展を成すかを重要課題として万全を期して努力精進したいと思います。

ニークな企画で幕を開けた。芸術の独自性、主体性を既往の概念や集団に拘束されることなく、自由な製作発表の場としたことが、多くの共鳴者を獲得し、第1回としては予想を上回る出品となり、成功につながった。

結果として伝統部門は漢字、仮名、篆刻を含め入選率は41%の厳

選となった。国際書展にちなみアメリカ本土、台湾、欧州からの出品もあり、日本の書の紹介やディスプレイの盛んな今日、現実海外で習練を積んでいる外人や日系人が出品していることも本展の特色であろう。

応募作品をはじめ入選作の傾向は明清調が多く、また秦漢北魏に素材を求めた篆隸作品もかなりの水準を示していて、今後の飛躍が予想される。一般愛好者を含めて

## 書にあらわれた「自己の生の証」

第1回サンケイ国際書展 国井誠海  
現代書部門審査主任

本展現代書部門の鑑審査は、小川、佐野、国吉、斎藤、田村、国井の6人で965点の出品作について行った。出品作は国内各都道府県のほかアメリカから55点の出品があり、雅仙半切から3×6尺大の紙に少字数や近代詩文を、現代的息吹を盛り上げて書いた作、および墨象的作品などであった。なかには、現代書部門のほか伝統書部門に1人で2点出品した人も100人ほどあった。

鑑審査の方法は、鑑別は○×の立て札で、審査は①②③の点数立

陳列できなかった応募作は、その努力に敬意を表すが、やはり未完な荒削りのものが多く、再度の努力に期待したい。

入選作品も明清調が主体で、練成の度合い、格調の高さに今後の課題を残しているが、結果として一般応募作品からも優秀作が入賞するなど第1回展はクリーン、クリアな評価を得ることができ、将来に明るい期待を与えた。

て札で票決し、上位得票作より入選、入賞と決定した。そして、これを一般に公開した。

とかく芸術観を異にする人達の総合して行う公募展では、不純な審査が行われがちであるが、本展に関する限り、そのようなものが入り込む余地は少しもなかった。

作品内容は、第1回展のため玉石混交を否めぬが、いわゆる「お習字的作」より「自己の生の証を確かめようとした作」が多く、国際書展にふさわしく、外国人の作にも目を見張る作を数多く見た。

以下、私の注目した作に寸評を加えると（敬称略）

入澤和子＝渴筆を生かし、ダイナミックな動勢が生きた作。

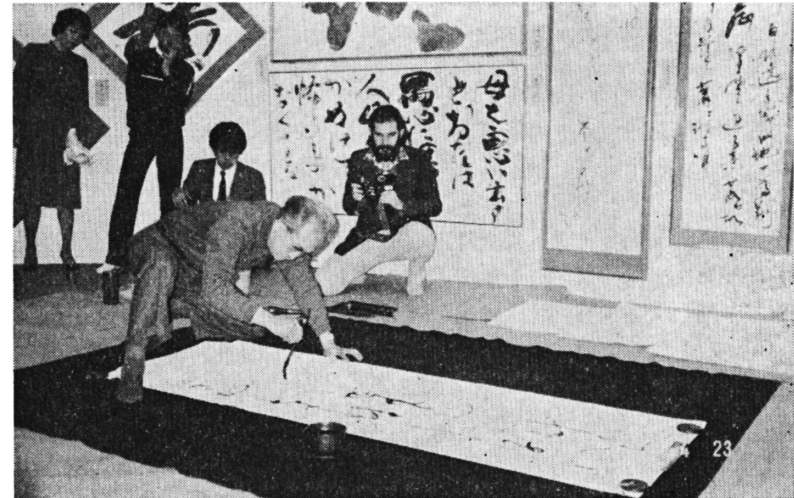
浅井清崖＝「頌」字を墨のマスで凝集した渾厚な妙作。

伊藤溪流＝問題意識の深い字句

で現代を訴求した張力豊かな作。

根岸白虹＝カラーのマチエルを駆使し、筆意をよく打ち出した快作。

浅見然犀＝表現停止のよく利いた沈厚な妙作。



## 鮮やかな運筆にため息――

### ――サンケイ国際書展揮毫会

#### 個性豊かに…

第1回「サンケイ国際書展」は東京・新宿新都心の新宿センタービル51階朝日生命ギャラリーで開催されたが、これを記念する“公

開揮毫会”が4月23日午後5時半から会場内で行われた。

揮毫会には、現代書審査主任・国井誠海、伝統書審査主任・林錦洞、現代書審査員・小川瓦木、伝統書審査員小川南流の各氏が参加、

各部門にわたって性格の異なる個性豊かな書と墨象を達筆で1時間にわたって披露，会場につめかけ

た見学者たちは，めったに見られない大家の鮮やかな運筆をため息まじりに見まもっていた。

## 第2回サンケイ国際書展

### 審査員・事務局人事決まる

#### 〈審査員〉

秋元梢風 池田青軒 岩田正直  
上野竹舟 遠藤乾鳳 小笠原攝耀  
小川瓦木 小川南流 川上鉄晶  
北島瑞峰 国井誠海 国吉幸舟  
小久保海堂 佐藤青龍 佐野丹丘  
斎藤清芳 柴田侑堂 田中鳳柳  
田村桃溪 十鳥靈石 林 錦洞  
前田古潭 三宅劍龍 山田松鶴  
龍源齋大峰 渡辺誠泉

(敬称略・50音順)

#### 〈事務局〉

事務局長 菱山 甫 事務局次長  
大柴英雄 総務 国井誠海 林

錦洞 小川瓦木 山田松鶴 十鳥  
靈石 総務付 石川天瓦 松長峰  
石 林田翠龍 審査事務部長 岩田  
紅洋 審査事務次長 中野真如 入  
沢和子 吉田東霞 三上錦水 搬  
出入部長 国吉幸舟 搬出入部次長  
田野倉萼水 北島瑞峰 龍源齋大  
峰 川上鉄晶 陳列部長 田中鳳  
柳 陳列部次長 岩田正直 佐藤  
青龍 前田古潭 秋元梢風 表彰  
部長 柴田侑堂 表彰部次長 根岸  
鷺山 三宅劍龍 小笠原攝耀 接  
待部長 斎藤清芳 接待部次長 山  
中秀翠 遠藤乾鳳 佐野丹丘 会  
計部長 新井保昭 会計補佐 茨木  
真理

展覧会設計設備・陳列(出張可)  
作品搬出入・梱包発送・作品保管

## (有) 牧野商会

本社 東京都台東区台東1-3-2 ☎ 03(832) 7713  
営業所 東京都台東区上野公園東京美術館内 ☎ 03(822) 4473



第1回展授賞式風景(写真右側サンケイ新聞社・北川貞二郎専務取締役，左側大賞受賞者・入沢和子さん)

## サンケイ国際書会会則

書芸術の国際交流を通じて世界各国との友好親善を深め合い，世界平和に寄与するとともに，国際間相互の技能，創作活動のいっそうの向上，発展を期することを目的とする。

#### 本会の事業計画

1，本会はサンケイ国際書展の推

進母体として毎年，その遂行に当たるほか，サンケイ新聞社主催名義による各種書展を開催，遂行する。

2，本会のレベルアップを図るため，研修会を開催する。

3，世界各国指導者との交流親善を図る。

4, 会報を発行する。

5, その他。

#### 役員・会員構成

1, 各界学識経験者に顧問を委嘱する。

2, 会長, 副会長, 専務理事の役員を定める。以上の役員はサンケイ新聞社の役員, 幹部社員で構成する。

3, 常任理事, 理事, 監事, 評議員の役員を定める。以上の役員はサンケイ国際書展審査会員以上の書作家で構成する。

4, 事務局を設置し, 事務局長, 経理担当を定める。以上の役は

サンケイ新聞社の幹部社員で構成する。

5, 会員はサンケイ国際書展の無鑑査作家以上で構成する。

#### 役員任期

1, 任期は, 2年とし改選期は2年毎の10月とする。

#### 年会費

1, 常任理事, 理事, 監事…3万円 評議員…2万円 会員…1万円とする。

2, 会費は毎年9月末までに納入する。決算報告は10月とする。

#### 本会則の施行

1, 昭和59年9月28日とする。

島村谿堂 須賀桂洲 鈴木白鴻  
須藤松閑 竹来嵐翠 田代研洋  
田野倉萼水 田村溪道 富永奇洞  
豊田大仙 中川竹泰 長島秀石  
中島三刀 中野真如 西尾秀誠  
納谷古石 野村無外 長谷川冬青  
林田翠龍 樋口誠谷 日吉白耀  
布施鷹峯 細野春葉 本多道子  
前田古潭 松下清泉 松田海軒  
松長峰石 光本三千萬 三上錦水  
三宅玉水 三宅劍龍 宮崎春峰  
武藤春卿 森 東崖 安福心梗  
山上紫紅 山口天象 山中秀琴  
山本春泉 山本宏城 吉田東霞  
龍源濟大峰 渡辺誠泉

会員 相川樂陽 朝比奈玄甫 浅  
野翠浦 新井大巖 新井莫水 飯  
野紫香 池田象賢 生田観周 生  
田博子 石井汀梗 石川陽竹 石  
沢源峯 泉 行雄 板橋東国 市  
川梧翔 伊藤溪流 今田篤洞 岩  
野濤翠 岩村恵雲 宇佐見秀園  
江守春峰 遠藤鶴園 大越雪堂  
大塩聖山 大矢鳳城 岡村翠瑤  
小名未土里 小野紫雪 小野文泉  
小原藍石 恩田政光 加藤史鳳  
加藤紫香 金田竹山 株本龍峰  
神谷芳泉 菊池敬令 北島藍扇  
北野玉陽 君島青鸞 国木軒陽  
栗山鳳雪 幸 梢花 小出扶佐子

小岩溪水 小杉修史 小林溪水  
今 文彬 近藤公柳 斎藤遊雲  
斎藤柳風 嵯峨帶夢 笹 静風  
篠山径梗 佐藤光道 佐藤静香  
佐藤秀楼 佐藤龍跳 佐藤汎遙  
佐野景石 志磨古堂 清水暁岳  
鈴木溪玉 鈴木嵯和子 鈴木照仙  
鈴木菱雲 鈴木穂光 関根軒山  
関根鉄舟 祖父江白麗 庄司海巖  
高橋大乗 高橋春泉 高橋鶴舟  
武 翠竹 武井朴風 竹内小逕  
武子真龍 武田晴軒 嶽肩谿邨  
田嶋松月 橋 右堂 田中青流  
田中康堂 田村梢波 樽谷龍風  
丹野真寿 千葉松谷 寺島香舟  
土井梢遊 戸叶祥山 富樫麗芳  
戸田巍峰 毒島希水 富田翠泉  
長岡蘭秀 中塚佳遊 長瀬沙焱  
永田龍王 中田香陽 中田里鶯  
中西地涯 中山祥雲 滑川貴山  
成岡瑞雲 西川万里 能瀬芝梗  
野地白雲 野原梅峰 萩原秀堂  
橋本竹風 蓮見翠名 馬場芳苑  
濱倉蒼風 濱倉芳龍 林 芳道  
樋口翠楓 人見恵風 兵頭清華  
平田白虹 深沢芳舟 福倉翠竹  
福島基水 藤田華逕 星野翠光  
堀 竹洞 堀川麗水 櫃田秀邨  
松岡白碩 松田秀堂 松村暢香  
松本翠嵐 丸山光泉 丸山草鳩

## ＝サンケイ国際書会＝

会 長 北 川 貞二郎  
副 会 長 川 島 吉 雄  
専 務 理 事 菱 山 甫  
常 任 理 事 小川瓦木 国井誠海 十  
鳥靈石 林 錦洞 山田松鶴  
理 事 岩田紅洋 上野竹舟 遠藤  
乾鳳 小川南流 川上鉄晶 国吉  
幸舟 斎藤清芳 佐野丹丘 柴田  
侑堂 田中鳳柳 田村桃溪 監事  
北島瑞峰 会 計 軽辺敏彦 事務  
局 長 大柴英雄  
評 議 員 秋元梢風 秋山弦草 浅  
井清崖 荒井春晃 荒木香心 安

斎春鳳 池田青軒 伊沢清玲 石  
井春風 石川天瓦 石沢康仲 市  
川聖澄 今坂芝光 入沢和子 岩  
田正直 上野紀舟 上野鶴陽 内  
川春山 江副琴泉 江袋稜岱 遠  
藤竹泉 老本静香 大井碧水 小  
笠原攝耀 小川圭南 小川紫峰  
小名雪王 小野之鸞 尾身帶嵐  
梶野暁涙 風岡五城 勝田景泉  
加藤照峰 川上春泉 菊地清玄  
小久保海堂 小島州石 昆 逸山  
坂口天月 嵯峨宗和 佐藤青苑  
佐藤青龍 敷山大観 島崎草雨

宮崎春華	宮沢静峰	峯崎随雲	山本愛泉	湯地景嶂	吉岡康園
美藤一光	村上尚蕙	森井熊峯	吉峰芳亭	吉村梢陽	吉村桃道
山下萬里	柳 桂岳	矢野道子	若林武夫	渡部東風	和田鷺風

### …えびそーど□エピソード…

△4月14日の第1回サンケイ国際書展の祝賀パーティーは金基昇韓国国展審査員の乾盃の音頭で賑やかに繰り広げられたが、なにしろ400名以上の参会者のため熱気ムンムンの会場だった。

終って有志による二次会に繰り込んだところが銀座さくらんぼ。銀座の錦ちゃんこと林錦洞、NHK鐘三つの斎藤崧堂、ミスターサンケイカラオケ菱山甫三氏が審査員。まずはこの三氏が模範演技を披露、審査員

としての実力の程をみせてから、佳代子ママの司会により千葉賢堂をトップバッターにカラオケ大会の開幕である。世は将来にカラオケ時代と云うだけあって皆んな上手い。優劣つけがたいと頭を悩ます審査員だったが結局、サンケイカラオケ大賞は本堂歌苑の頭上に、小川圭南夫妻にはアツアツ賞が。サンケイ国際書展審査員岩田紅洋はブービー賞とどうも作品を書くようにはいかなかったようだ。(月刊書道30巻6号より)

## 2月21日午後6時

### 第2回サンケイ国際書展搬入締切日!!

筆・墨・硯・法帖・画仙紙・仮名料紙

## 文久元年創業 玉川堂

〒101 東京都千代田区神田神保町3-3 ☎03(264)3741

地下鉄営団東西線・都営新宿線九段下駅 下車3分

### 編集後記

師走!会員の皆さまにはますますご活躍のこととお喜び申し上げます。サンケイ国際書会も本年9月28日、諸先生方の多大なご協力を頂き無事結成され心からお礼を申し上げます。

書会事務局の一員として、まず何をしなければならぬか、自問自答の毎日です。まずご参加いただきました諸先生方のお名前とお顔が一致せず、菱山専務理事の手を煩わしております。お陰さまで書会の全役員名簿の一覧表が完成し、それを基本に事務がスムーズに推進するよう頑張っています。

書会が発足し事務局として、まず初めに取り組まなくてはならない会報の発行も、去る11月12日、第1回常任理事会を開きました。当日大変お忙しいなかをご出席いただきました小川瓦

木先生、国井誠海先生、十鳥靈石先生。また先約を取り消してまでご出席いただきました林錦洞先生、山田松鶴先生と4時間近くもご討議いただき、お手もとの会報第1号が完成したわけです。常任理事の先生ありがとうございました。会報内会告に発表いたしました「第1回役員研修会」も書会の会則・事業企画第2条(本会のレベルアップを図るため研修会を遂行する)にもとずき開催いたしますが、諸先生方のご参加を心からお待ちいたします。

会報第1号の発行にあたり事務局として常任理事、理事、監事をはじめ評議員、会員の諸先生にご迷惑をかけぬよう頑張ります。よろしくご指導、ご協力をお願い申し上げます。

### —お願い—

常任理事・理事・監事・評議員・会員の皆様のなかで住所・電話番号・郵便番号等の変更があった場合には必ずサンケイ国際書会事務局まで、ご連絡下さいますようお願い致します。

### 編集・発行

〒100 東京都千代田区大手町1-7-2 ☎03(231)7111  
内線3014・3015 サンケイ新聞社事業局内

サンケイ国際書会事務局